

Ⅲ 遺 物

1 土 器

東堀河 S D1300からは多量の土師器・須恵器・黒色土器および製塩土器が出土した。土器類の総量は整理箱で62箱にもおよぶ。このような多量の土器の出土は、従来の宮・京の調査地点における状況と比較しても際立っている。出土土器のうち、土師器と須恵器の整理箱数での比率は約1 : 2である。しかし、須恵器の半数強は甕であり、これを除いた食器類で比較すると、土師器、須恵器はほぼ同率となる。

土器の年代は8世紀中葉から9世紀初頭におよぶ。9世紀初頭の土器は S D1300の最下層からも出土し、一部の層位はかなり攪乱を受けていることがわかる。土器の大多数は水流による磨耗痕がなく、調査地の近辺で堀河に投げられ、そのまま堆積したのであろう。

上記のように、土器は層位的に分類することができないため、ここでは土師器・黒色土器・須恵器の三者に分け、それぞれ一括して扱うことにする。また、遺物の記載は紙数の¹関係から特徴のあるものにとどめる。

A 土師器 (PL. 6, fig. 9・10)

杯 A (1~8)・杯 B (9)・杯 B 蓋・椀 A (10~12)・椀 C (13)・皿 A (14~21)・皿 B (22)・皿 C (23~26)・高杯 (27~30)・盤 B (31)・壺 B (32)・壺 E・甕 A (33~37)・甕 B (38)・甕 C (39)・竈 (40) が出土している。

暗文を有する杯 A のうちには、1・5・6のように放射暗文が広い間隔で雑に施されるものもある。皿 A (20) と椀 A (12) は外面の底部、口縁ともにヘラケズリで調整する c 手法が用いられている。皿 C には、小さい平底のもの (23・24) と上げ底のもの (25・26) がある。盤 B (31) は高台を有し、外面は粗いヘラミガキ、内面は底部にラセン暗文、口縁部には二段の放射暗文と連弧文が施こされる。高杯 (27) は口縁端部にもヘラミガキが行なわれ、杯部下半はヘラケズリで調整が行なわれている。壺 B (32) は人面墨書土器に使用される粗製の土器である。底部外面には型作りの痕跡が認められ、外面はハケによる調整の後に、ナデによる調整が行なわれる。外面には煤が付着しており、甕に転用されたことを示す。甕 C (39) は口縁が斜め上方に開き、外面下半はヘラケズリで調整されている。一般的には丸底を呈するが、本例は平底である。甕 A (36) の内面には叩きによる成形時の当具の痕跡を残す。竈 (40) は底径48cm、器高50cmの大型品。截頭砲弾形の円筒の下部をヘラで切り取って成形した焚口の周囲に、幅の広い廂をとりつける。外面はタテ方向のハケで調整されるが、内面の調整は煤が付着して明確ではない。胴部両側面の中央よりやや下方に径5cmの円孔を穿つ。煤は内面および焚口部外面中央および廂の外面にも付着している。奈良時代中頃のものは、1・5・6・7・9・14・15・19・22、後半のものは2・3・4・12・18・20・21があげられる。

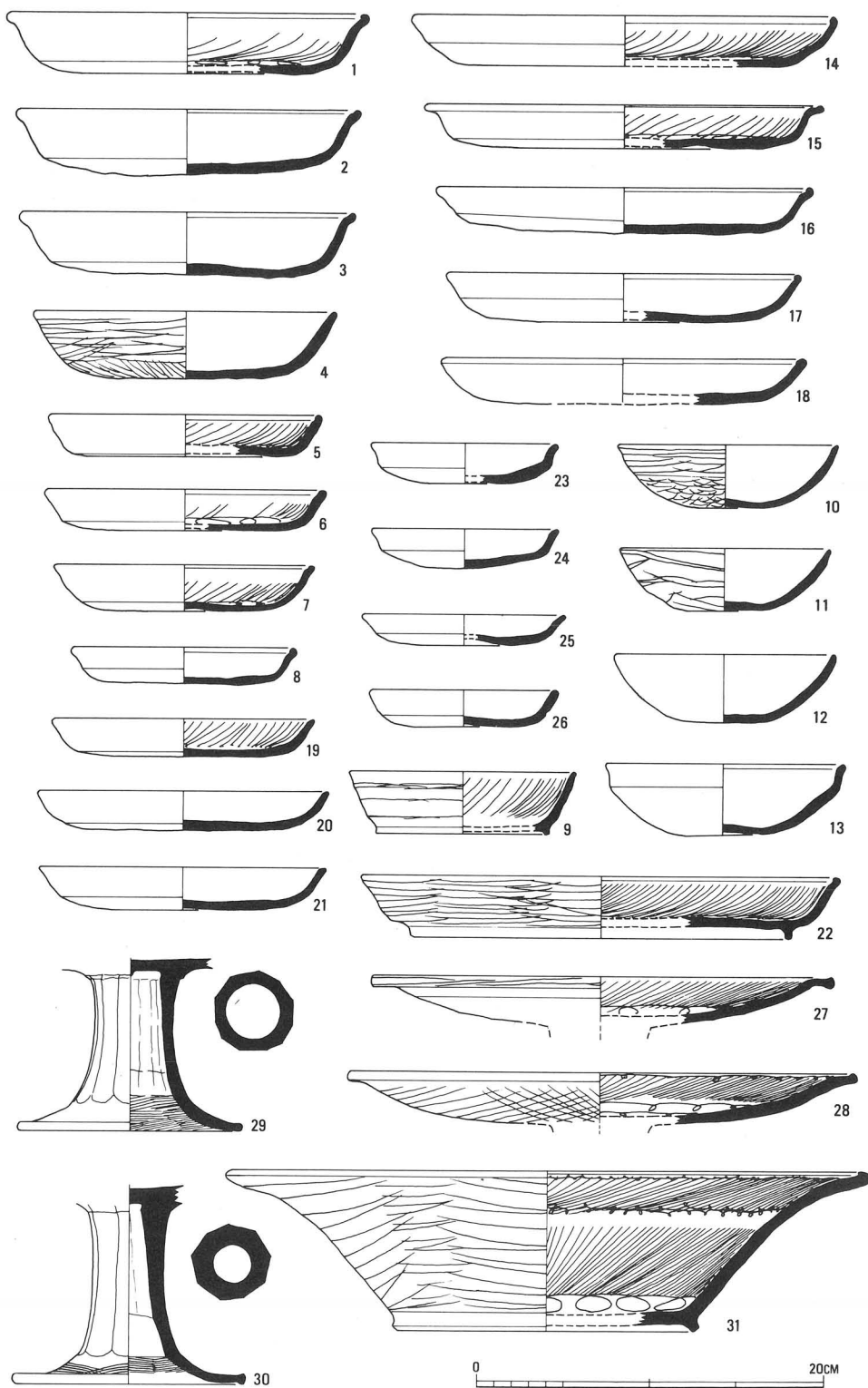


fig. 9 土師器実測図

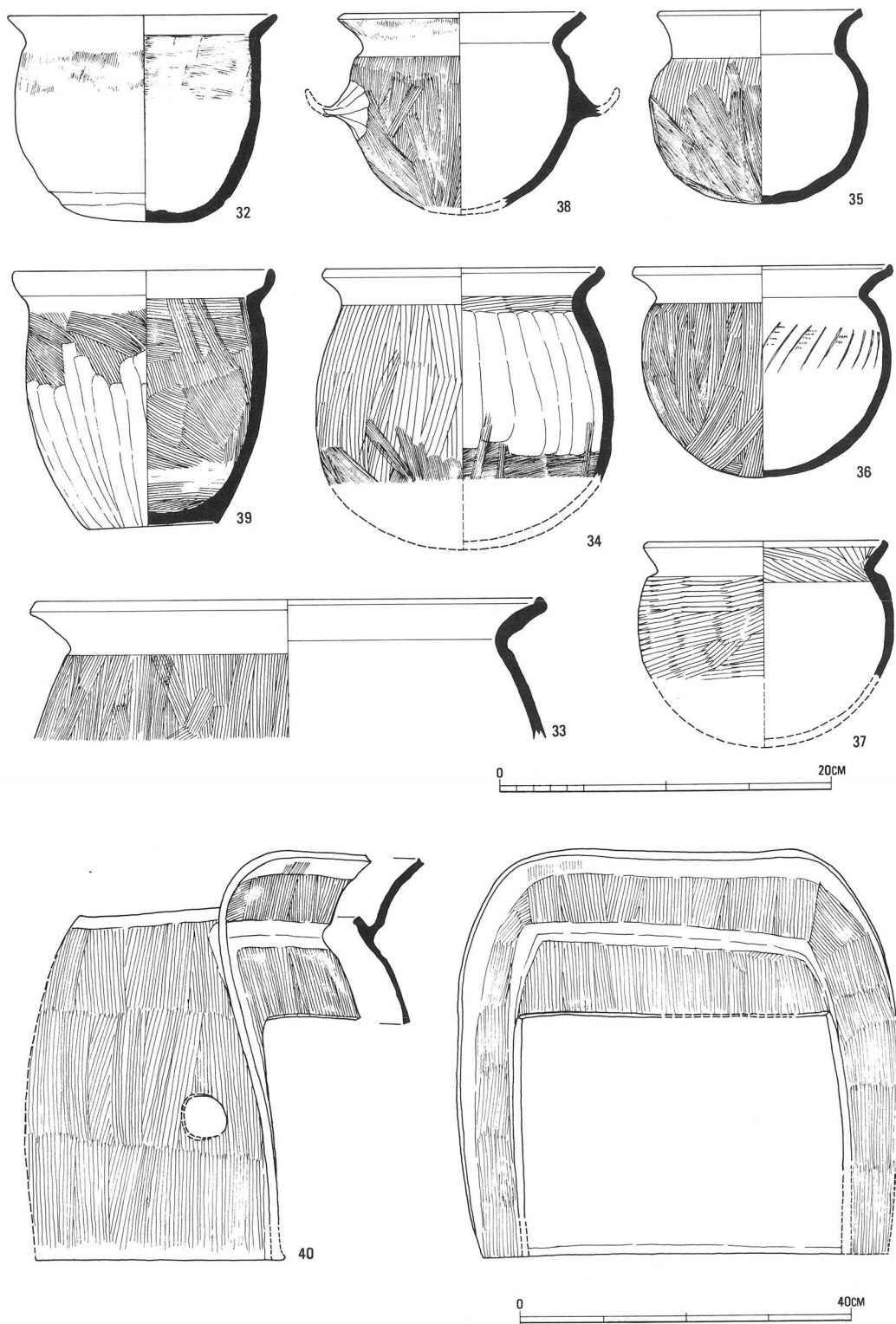


fig. 10 土師器・竈実測図

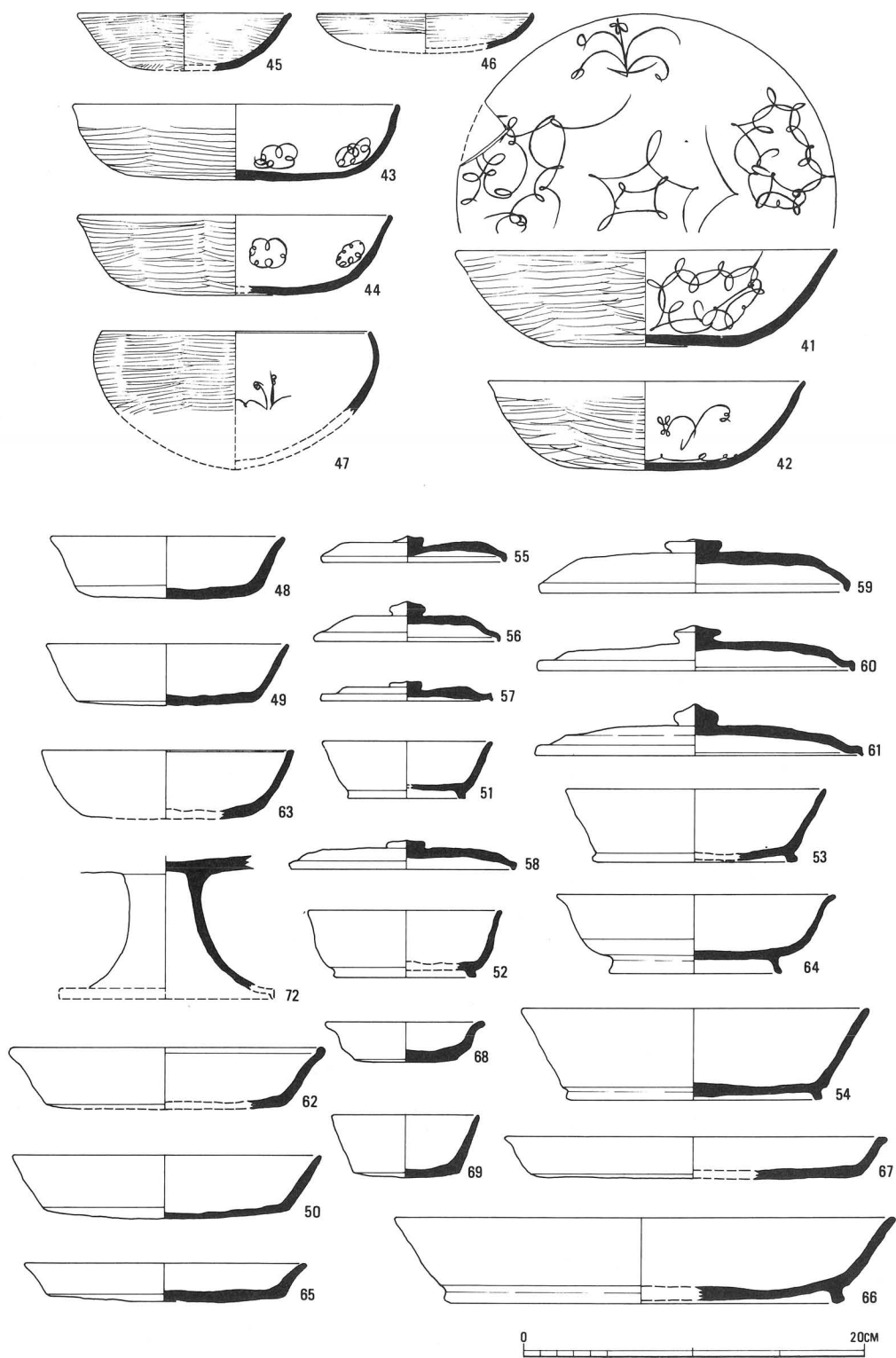


fig. 11 黒色土器・須恵器実測図

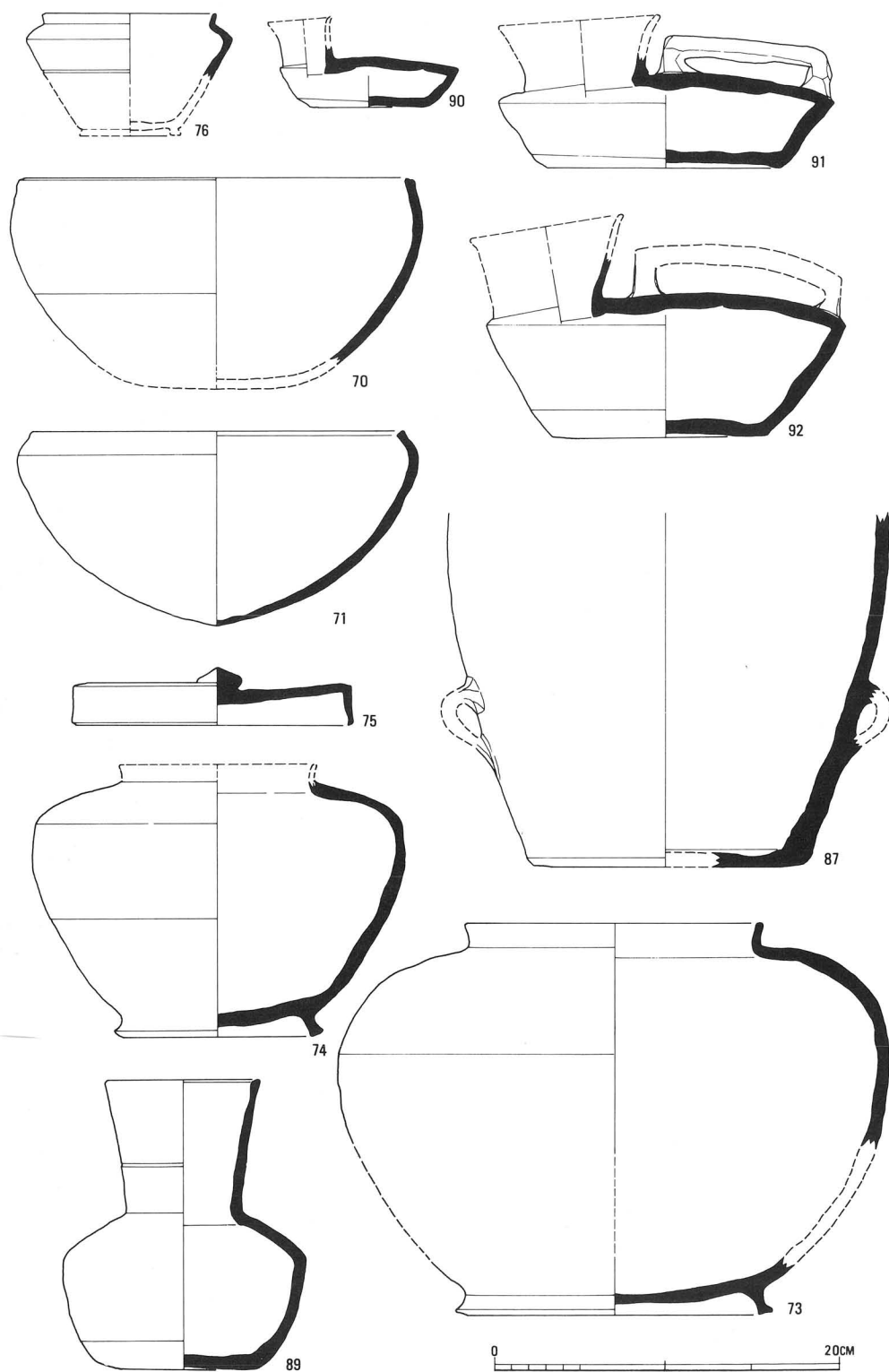


fig. 12 須恵器実測図

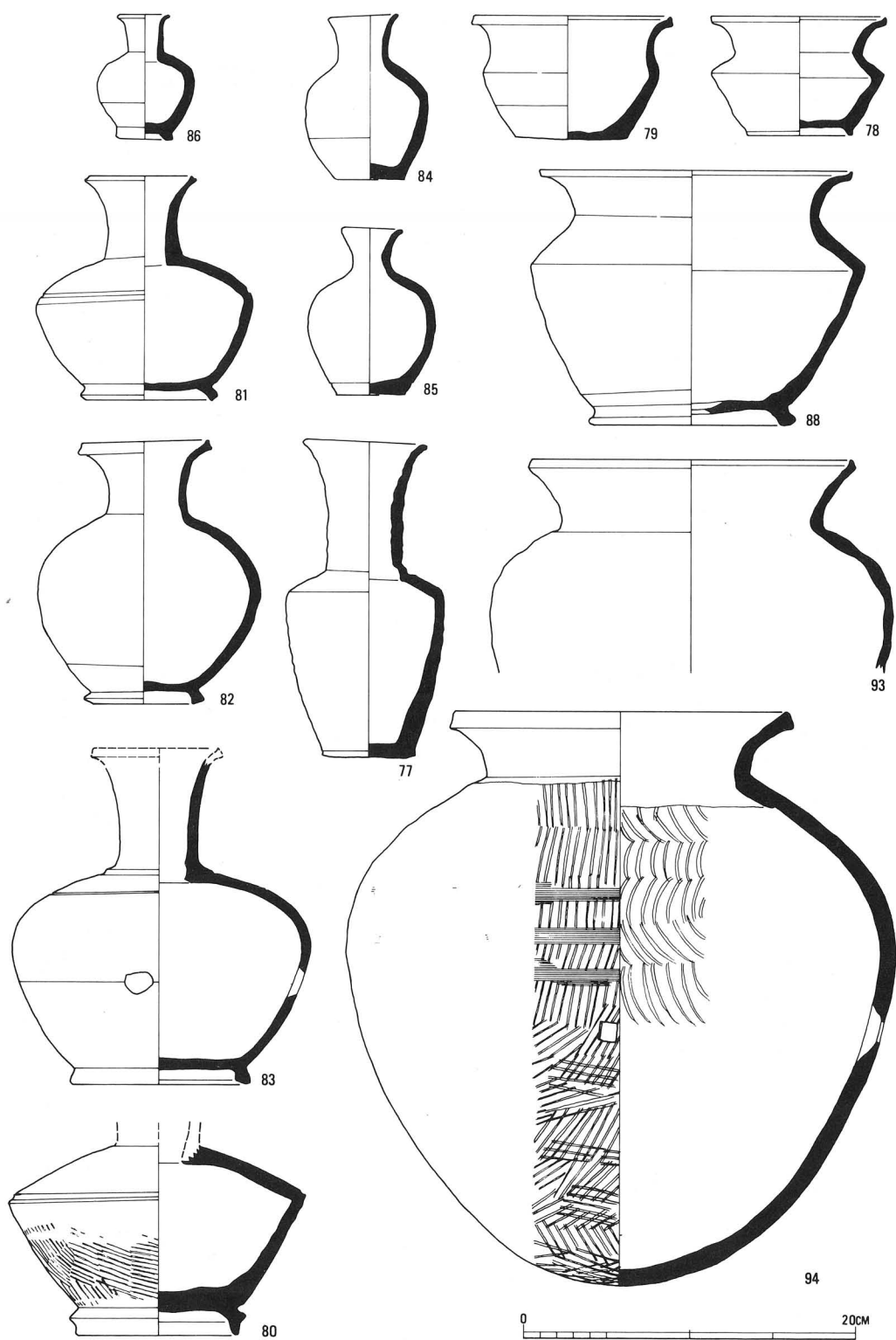


fig. 13 須恵器実測図

B 黒色土器 (PL. 6, fig.11)

杯A (41~45)・皿A (46)・鉢A (47) が出土している。内外面ともに炭素を吸着させる黒色土器B類である。杯Aはすべてc手法による調整が行なわれ、口縁部は内外面ともに横方向の丁寧なヘラミガキが行なわれる。45を除き、内面に渦状暗文が施される。皿Aもc手法によって調整されている。内外面ともに横方向の丁寧なヘラミガキが行なわれるが、外面のヘラミガキは口縁上部にとどまり、口縁下半部、底部にはおよばない。また内面に暗文は見られない。鉢Aは口縁部外面がベラケズリ調整され、内外面ともに横方向の丁寧なヘラミガキが行なわれる。内面には渦状暗文が施こされる。従来の知見では、これら黒色土器の年代は9世紀初頭に位置づけられる。

C 須恵器 (PL. 7, fig.11~13)

杯A (48~50)・杯B (51~54)・杯B蓋 (55~61)・杯C (62)・杯E (63)・杯L (64)・皿A (65)・皿B (66)・皿C (67)・皿E (68)・椀A (69)・鉢A (70・71)・高杯 (72)・壺A (73・74)・壺A蓋 (75)・壺E (76)・壺G (77)・壺H (78・79)・壺K (80)・壺L (81~83)・壺M (84~86)・壺N (87)・壺P・壺Q (88)・壺X (89)・平瓶 (90~92)・甕A (93・94)・大形器台が出土している。

杯E (63)は平底に内湾する口縁を有する器形で、口縁端部は平坦で内傾する。杯L (64)は口縁下部が内湾気味に立ちあがり、口縁端部近くで強く外反し、端部は丸く仕上げる。高いふんばりの強い高台がつき、高台端面は丸くおさまる。杯E・杯Lはともに銅鍔の形を模した器形である。杯C (62)は土師器杯Aの形態をとる。鉢A (70・71)の外面には横方向の丁寧なヘラミガキが施されるが、70のヘラミガキは下半部にはおよばない。70の口縁端部は外傾し、71の口縁端部は内傾する。壺Gの底部切離し方法には、ヘラ切りと糸切りの両者がある。壺K (80)は、肩が張って稜角を呈する体部からなる長頸壺であり、稜角の部分には2条の沈線が施される。底部には強く外にふんばる高台がつけられる。壺L (83)は胴部最大径直下に焼成後の穿孔がある。小形の壺Mには高台のつくものとつかないものの両者がある。底部切離し手法には壺G同様ヘラ切りと糸切りの両者がある。壺Q (88)の底部には焼成後の穿孔がある。広口の直口縁を有する壺X (89)は胴部の肩が張る器形で、頸部に1条の沈線が施こされている。奈良時代には見ない器形である。他に6世紀代の大型器台が出土していることからみて、古墳時代の所産の可能性が大きい。

甕A (94)は胴部最大径の位置に三条のカキ目が施される。内面は全面に漆が付着しており、漆容器として使われたのであろう。胴部中央には小さな穿孔があるが、漆が付着していないことからみて、廃棄時のものであろう。以上のうち、奈良時代前半から中頃に属すものに、55・56・59~61・74・80・90~92などが、後半に属すものに78・79・83が、末葉に属するものに57・58がある。84~86は9世紀初頭に降る可能性がある。

1 器種分類および調整手法は『平城宮発掘調査報告』Ⅶ・Ⅺに準拠している

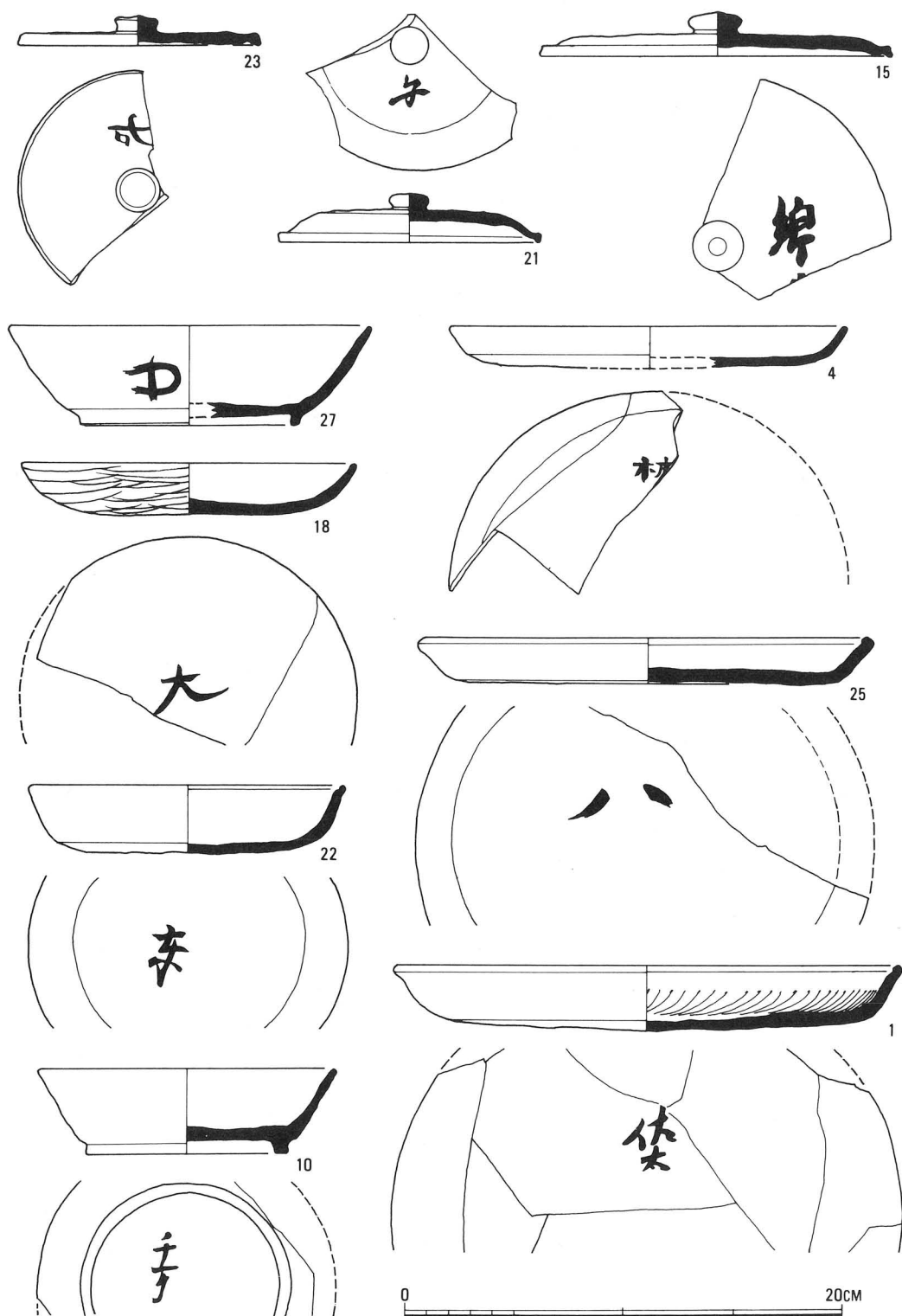


fig. 14 墨書土器実測図

2 祭祀用土器・土製品

堀河S D1300からは、前述した日常什器の土器類の他に、量的にみれば、それにははるかに及ばないが、かなりの量の祭祀用土器・土製品がまとまって出土した。

A 人面墨書土器 (PL.8・9, fig.16・17)

人面墨書土器は、すべて堀底に近い堆積層から総数55点が出土した。完形品、人面のほぼ全容が知れるのは、わずか5点にすぎず、大半は破片である。出土層位と出土数の関係は、灰色粗砂層—36点、灰色砂層—16点、灰色粘土層—2点、暗灰砂層—1点 (fig. 6 参照)。

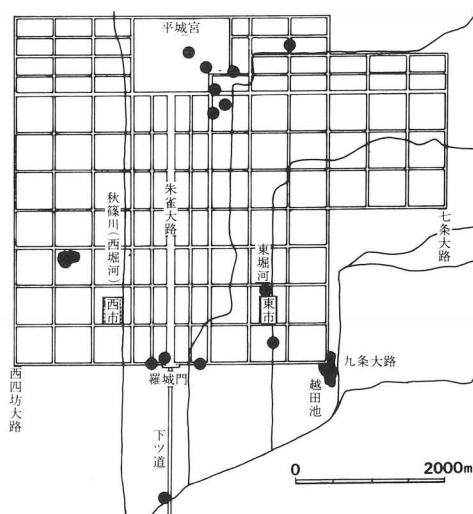


fig. 15 人面墨書土器出土地点

溝の堆積は流れのため、攪乱を受け、各層には時期の異なる遺物が混在した。人面墨書土器についても、層を超えて接合するものもある。従って、ここでは、層毎に記述することはやめ、まとめて報告する。

人面が描かれた器形は、すべて土師器で甕形と壺形があり、それには、日常使用するものと同形態のものと人面用に特別に作られたものがある。前者については、良好な資料はないが、27・29はハケ目調整の球胴の甕片で、29の内面には漆が塗られている。今回、壺に人面を描いた例は出土しなかったが、1975年の堀河の調査では、17・18のような小型壺に人面もしくは、墨線を描いた例が知られている。今回の調査では、この種の小型壺が約80点程出土したが、そのうち漆が付着する例が26点あり、中にははけで塗った例もある。

後者については、以下、「人面用土器」と仮称する。また人面は描かれていないが、人面が描かれたものと同じ方法で作られ、同じ形態を持つものが、多量に出土している。これらは、人面を描いたものと同様に祭祀に使用されたと考えられることから、ここで扱う。

人面用土器の製作には、次の2種の方法が知られる。一つは、皿状の型を用い、型の内側に粘土を詰め込み、底部を成形した後、型をつけたまま、その上に粘土紐を巻き上げ上部を成形する方法 (I類) である。もう一つは、粘土板ないし粘土紐で円板形の平底を作り、その上に粘土紐を巻き上げ上部を成形する方法 (II類-20) である。人面用土器の大半はI類であり、II類は数例知られているにすぎない。

人面用土器は、口縁部内外面をヨコナデで胴部内面をコテナいしヘラを使ってヨコ方向の削りで、底部内面すなわち型に納まる部位をナデで調整する。胴部・底部外面には特に調整を施さず、型の痕跡と粘土紐巻き上げ痕跡をとどめる。

I類は底部型作りであるため、丸底に近い形態で、一般に口径が胴部径を上まわる広口の甕の形態をとる。胴部の形態から次の3種に細分可能である。張りのない長胴タイプのa形態 (7・12・15・19)、と丸味のある胴部で胴と底部の境が大きく屈曲するb形態 (5・8・9)、

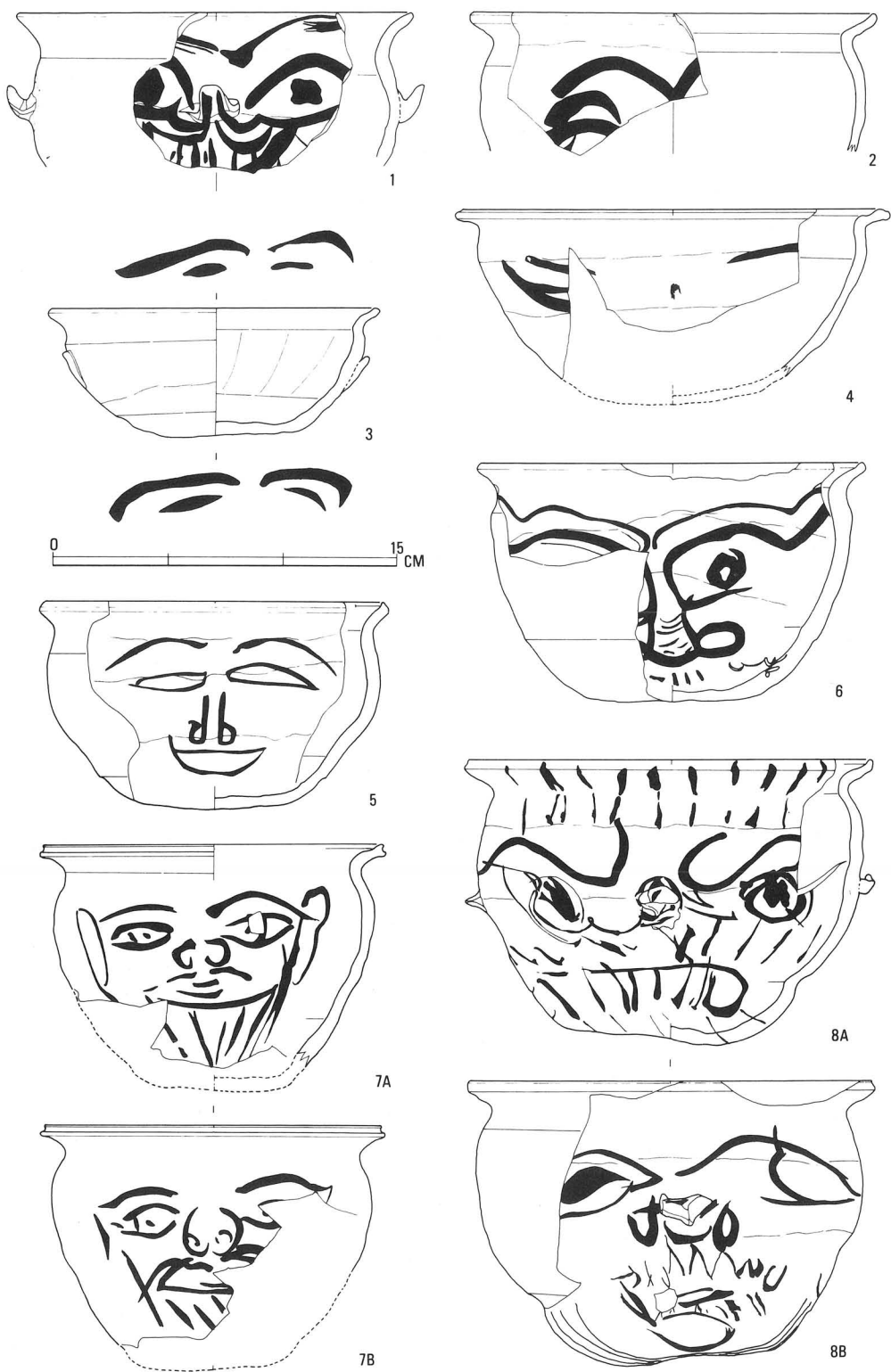


fig. 16 人面墨書土器

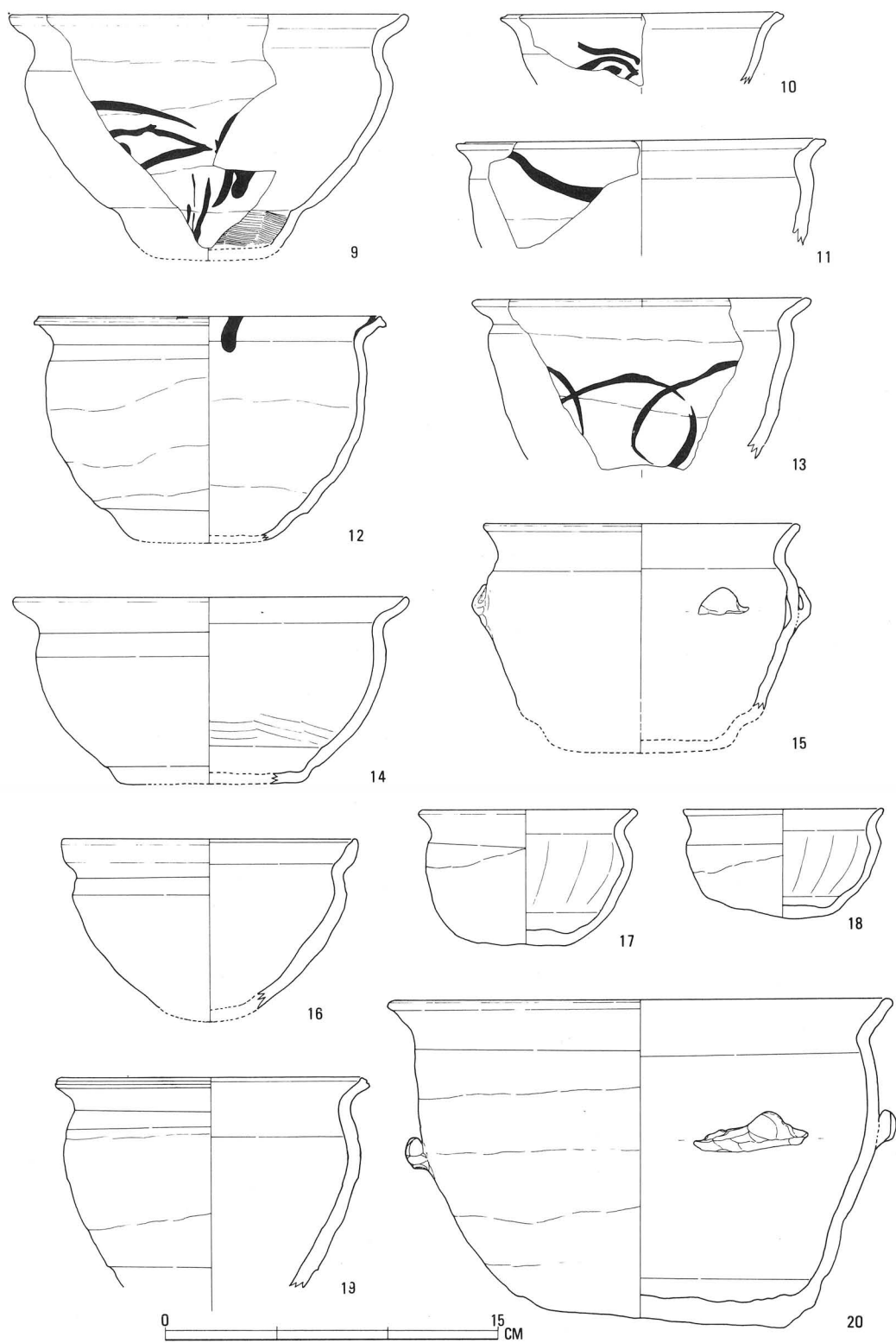


fig. 17 人面墨書土器

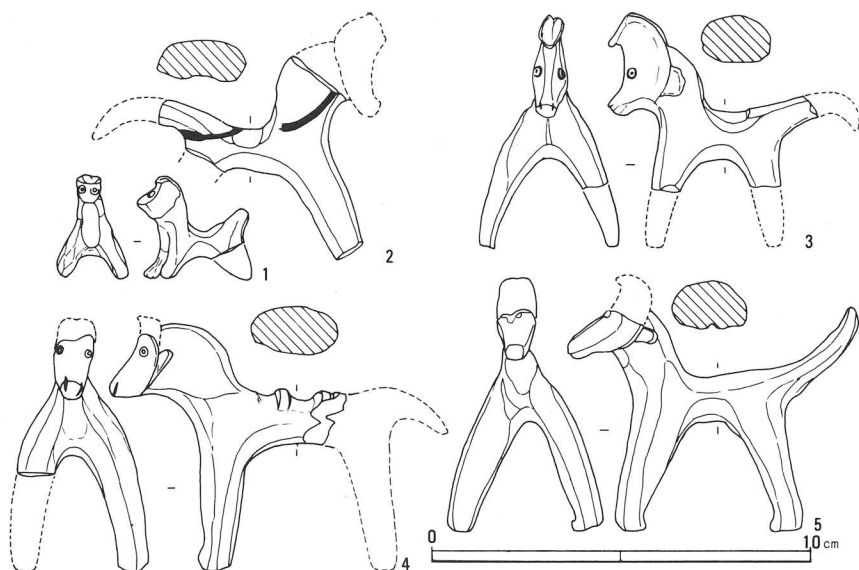


fig. 18 土馬実測図 1 包含層 2～5 S D1300 2は手綱と尻繫を、3は目を墨描く。

器高が口径のほぼ半分程で、底部から内湾気味に外方に開く胴部と外方に開く短い口縁部とからなるc形態(3・4・10)がある。

2分の1以上残存する資料はすべて胴部外面の相対する2面に人面を描いたもので、1面だけのもの、3面以上の例はない。胴部を顔の形にみたてるため、額の輪郭を表わすことはしない。多くは、ヒゲを生し、目をつり上げた男性の顔を表現したものであり、目や口といった顔の持つ諸要素をすべて表現した例が大半を占める。c形態のものには、顔の要素を省略した例が多い(3)。A類の3形態にもB類にも、胴部に把手状の突起を貼り付ける例が知られるが1・8は、その突起を鼻に見たてた珍しい例である。尚、I類で墨書はないが、漆が付着した例が若干ある。漆と人面土器祭祀の関係が今後の問題になろう。

B 土馬 (PL. 9, fig. 18)

土馬は総数58点(20個体以上)が出土した。

包含層から6点、九条々間路北側溝S D2352から1点の他は、すべて堀河S D1300からの出土である。多くは破片で全形をとどめる例はない。1は包含層から出土した小型馬で9世紀代に比定できる。他は奈良時代のもので、S D1300から出土したうち良好なものについて図示した。尾が上向くもの(5)と下を向くもの(2・3)があり、後者が多い。目はすべて竹管を押して表現するが、3は、さらに目の輪郭と目玉を墨書で表現した珍しい例。2は手綱と尻繫の紐を墨書。2・3は胴部上面を強くナデて周辺より一段くぼめ、鞍を表現する。4は完全に鞍を作り出した例。鞍の表現を持つ例は、上述の3例のみで、他は、5のように裸馬を表示したものである。

C 小型模造品 (PL. 9)

小型模造品には、カマド・甕がある。カマドは、3個体出土したが、全容を復原できるのは図示例のみ。器高13cm、底部径11.5cm、口径10.5cmをはかる。

1 巽淳一郎「平城京における墨書人面土器祭祀」『古代研究』28号 印刷中

3 木器・木製品 (PL.10・11, fig.19・20)

東堀河S D 1300からは木製の遺物が少なからず出土した。それらは祭祀具・容器類・服飾具、工具、紡織具および用途不明品である。ここでは主要品に限って説明を加える。木製品個々の年代は溝の堆積状況からは限定できないので、全て奈良時代末として扱う。

祭祀具 人形は正面全身像(2~5、17~19)と側面形(7)とがある。正面全身像には小型品(2~5)5点と全長1m前後のいわゆる等身の人形(17~19)3点がある。頭の形や肩のくり込み、手足の表現は大小を問わず共通する。やや特異なのは19と17。19は足の表現がない。17は腰からの切り込みを肩の位置で截ち落す。近世の立雛に近い形で手の切り込みがない。顔は墨で目鼻を描くものが5点、うち3点は鬚がある。男性であろう。人形の機能はいくつかあるが、奈良時代には主として、穢を流す祓種^{はらいぐさ}として使われた。ここにあげた人形は出土状態からみて大小に拘らず同じ目的に使用されたのだろう。但し小型品は個人が使うものだが等身の人形も個人を対象としたのか否か。また、19は厚みがあり単独で立てられるが、17・18の様に全長の1.2mに対して厚みの薄いものは支えがいる。等身の人形は機能・使用方法等考究すべき点が多い。側面形を表わす横人形は1点ある。扁平な板目板を削り、頭に烏帽子、顔に眉と鼻をつくる。上体を僅か反らせ腰以下は二本の足を簡潔に表現。表裏の肩に当る位置に木釘が各2箇所ある。釘は各々外側から打たれており、腕木をとり付けたのであろう。腹部には径3mmの穿孔があり、細棒(釘?)の一部が残る。人形を動かす装置の一部か。全長50.5cm、幅5.8cm。厚さ0.7cm。6は刀形。いわゆる飾大刀の模造品。刀身と把部を削り出す。身は把部より細身に作り把との境に段をつける。身は鋳造^{くわうぞう}で刃をつけ、鋳地に墨を塗る。把部は把頭まで真直ぐ通し、把間に把巻を表わす斜線を引き把頭は全面墨を塗る。全長29.8cm。1は斎串。細長い板材の上端を圭頭状に、下端を剣先状に作り上端近くの左右を各1箇所切りこむ。4点出土。3はスギ、他はヒノキ。

容器 漆器は特殊な壺、皿、蓋がある。11は托に壺をのせた形状の特殊品、黒漆を塗る。内部にも漆が厚くこびり付く。高さ4.8cm、口径4cm、底径8cm。似た形態の製品が長岡京跡にある。13は皿Aに該当。直径20cm、高さ2.5cm。挽物は蓋、皿、合子がある。蓋12は径10cm、現高6.1cm。側面と上面に2条1対の細刻線があり、下端近くには小孔がある。

14・15は皿。外面はロクロ挽による刃のタッチを留める。俎として使用したか見込や裏面に無数の切り傷がある。3点出土。16はいわゆる合子の身。底は厚いが側面は薄く丹念に調整する。口径21cm、高さ7.5cm。曲物は底部片を含め7点が出土。PL.11-27は、口径18cm、高さ19cm。26は同16.2cm、7.8cm。21はいわゆる折敷の破片。現存長で65cmある。もとは1mを超す大型品であろう。22は槽。横木に取った厚板を削りこみ、両端には把手を作り出す。全長64cm、高さ11.9cm。現存部幅は28cm。もとは40cm程度か。ケンポナシ。

工具その他 PL.10-23は刀子鞘、白木造で表面は丹念に調整。現存長9.5cm。PL.10-24は挽き歯の横櫛、みねの部分のみ遺存。10は糸車の梓木、8は鏝状木製品。直径6.9cm。20はいわゆる杓子。スギの板目板を削り、表裏とも荒い削りを加える。全長36.7cm。

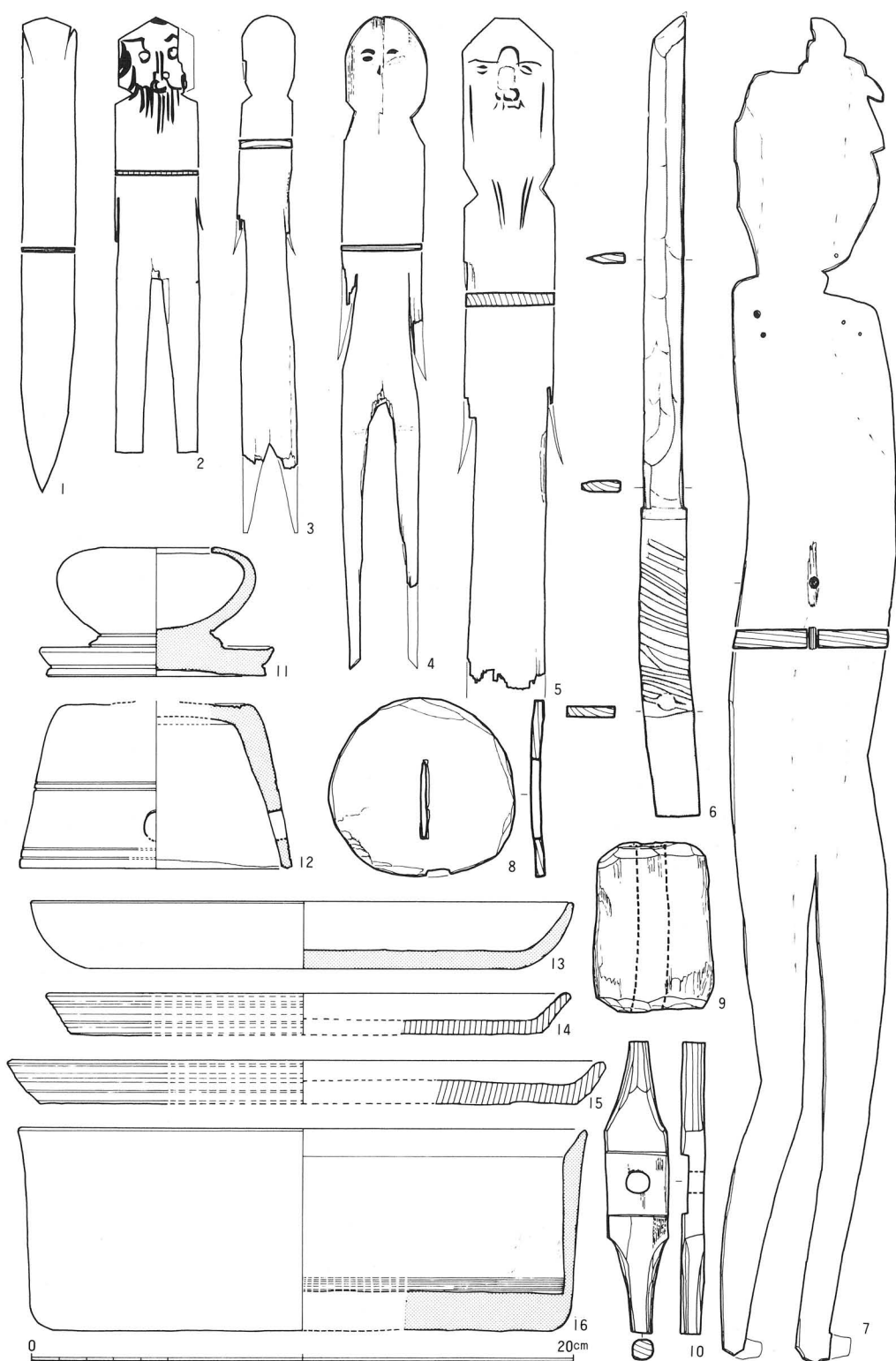


fig. 19 木製品実測図

ヒノキ(1、2、4～8、10、14、15) スギ(3) ヌルデ(9) サクラ亜属(12) カツラ(13) トチノキ(16)

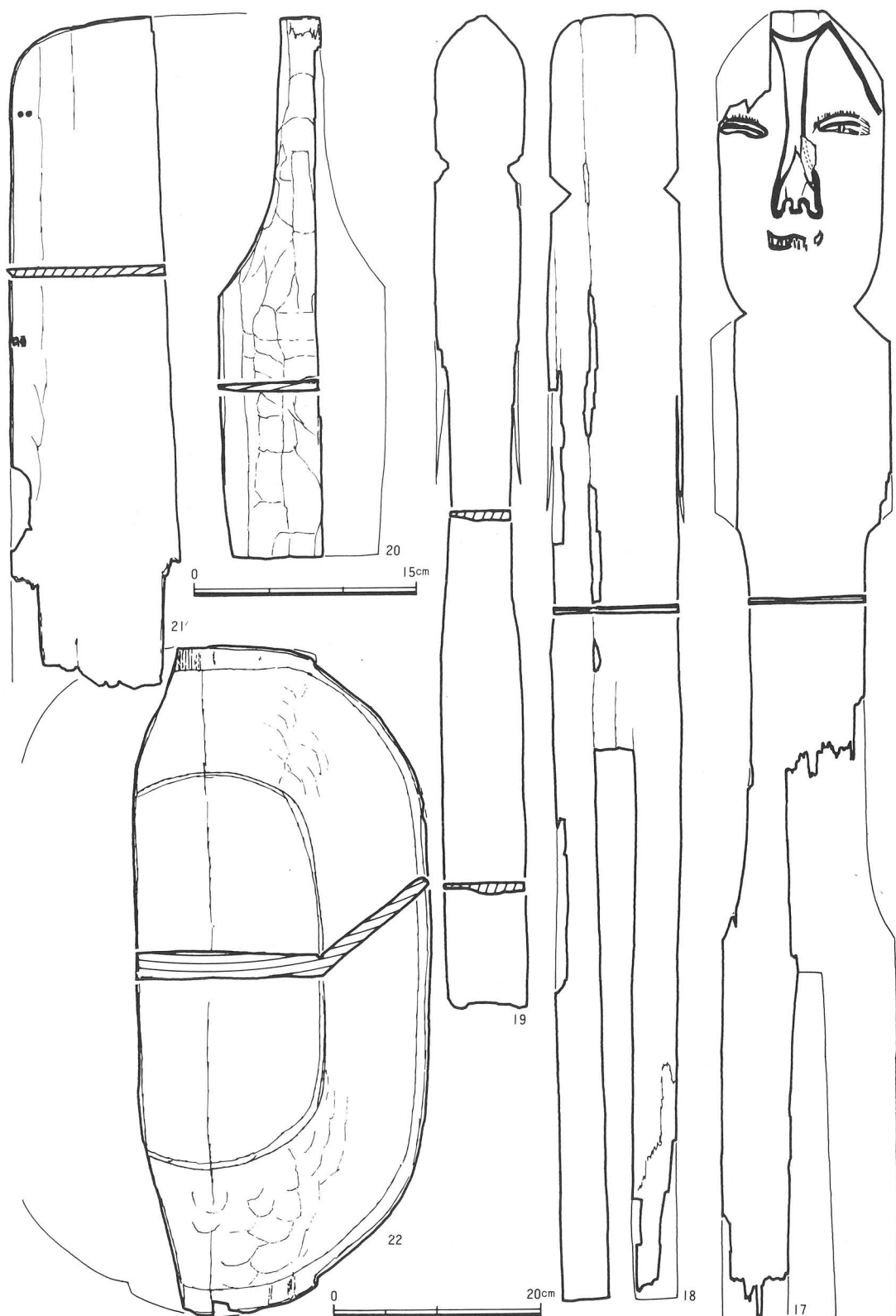


fig. 20 木製品実測図 ヒノキ(17~19,21) スギ(20) ケンボナシ(22)

4 金属製品・銭貨・石製品

東堀河S D1300から、総数 421点にのぼる多量の金属製品・石製品が出土した。金属製品には鉄製品283点をはじめ、銅製品15点、銅銭91点があり、きわめて多彩な内容をもつ。一方石製品は少なく、砥石と紡錘車が各1点ずつ出土したにすぎない。他に鉄滓29点、土製の鞆羽口片1点がある。これらの遺物はいずれも橋S X2350の橋脚部周辺から集中的に出土したものであるが、腐蝕、銹化の程度が僅少で、保存状態はきわめて良好である。

A 鉄製品 (PL.12, fig.21)

鍵 1は海老錠の鍵。鍛造品で丁寧な鑢がけにより細部の整形を行なう。把手は平角の角をとり八角形に仕上げ、末端を環状につくる。この環状部のみ断面円形となる。鍵の先端部を直角に折りまげて工字状に切りこむ。脚は一辺 0.4cmの角棒で、脚と把手の境に闊状の小突起をつくりだして両者を分ける。全長11.7cm。正倉院に伝存する鉄鏢子の中に類品があり、箱・櫃などの調度品に用いられた錠の鍵とみられる。

鉈 2は刃部を大きく欠損した鉈で、茎と刃の基部を残す。銹化が著しく残りは悪い。刃部は甲中央に鑢をもち両刃につくる。鉈特有の反りがなく、刃部断面が裏面に向かって軽く湾曲するところから木彫具の「生反」の可能性も残る。刃幅2.3cm。

錐 4点出土。3は長さ10.0cmの完形品。中央部で一辺0.3cmの角断面をもち、両端に向かって方錐状に尖る。他に螺旋状に捩りを加えたもの、茎のみ断面長方形となるものがある。

鑿 (4・12) 断面形と頭部の形状によって鉄釘と区別できる。4は脚の断面を径0.7cmの円形に仕上げた鑿で、直にのびた脚の下半を欠損する。現存長7.4cm。円頭部径1.2cm。12は長さ4.45cmの完形品。頭部を 1.1×0.85cmの長方形につくる。断面長方形の脚は先端に向かって徐々に丸味を帯びながら尖り、鑿先は径0.25cmの円形となる。

楔 15は全長5.4cm、刃幅2.1cmの小形の楔で、斧状の形態をとる。頭部は使用により敲きつぶれる。0.35cmの厚さをもつ頭部直下から、直線的に厚さを減じて刃先にいたる。

手斧 10は長さ7.9cm、刃幅4.5cmを測る鍛造の無肩式手斧。厚さ 0.2cm前後の鉄板を折りまげて内寸2.9×1.0cmに中空の袋部をつくる。袋部は全長の約 $\frac{1}{2}$ を占める。

鉄鏢 (5~8) 三形式5点が出土。5は広根式に属し、根の底辺に鋭い逆刺をもつ。両丸造で鑢はみられない。断面長方形の長い鑢被は闊に向かつて幅を広め、断面 0.3cm角の茎にいたる。茎はねじれて折損する。現存長8.5cm、身最大幅2.5cm。6・7は両丸造の鑿矢式。6は鑢被と茎の界に棘状突起をもつ棘鑢被と称されるもの。同形式のものが他に1点出土。7は闊をもたぬ形式で、身を八角につくり先端に刃をつける。8は完形に近い斧矢式。刃先と茎端をわずかに欠く。刃幅3.1cm、身の長さ7.1cm、現存長13.6cm。

鎌 9は刃部を大きく欠損した鎌で銹化が著しい。基端部に着柄のための折返しをもつ。

鉄 16は刀子に似た形状の鉄製品であるが、湾曲した柄のとりつき方から鉄であることがわかる。バネの支点部と片方の身を欠失し、残存部にも変形があるが、図示したような元支点の握りばさみを復原できる。本例は現在のU字形和鉄と刃のつく方向が逆であり、刃

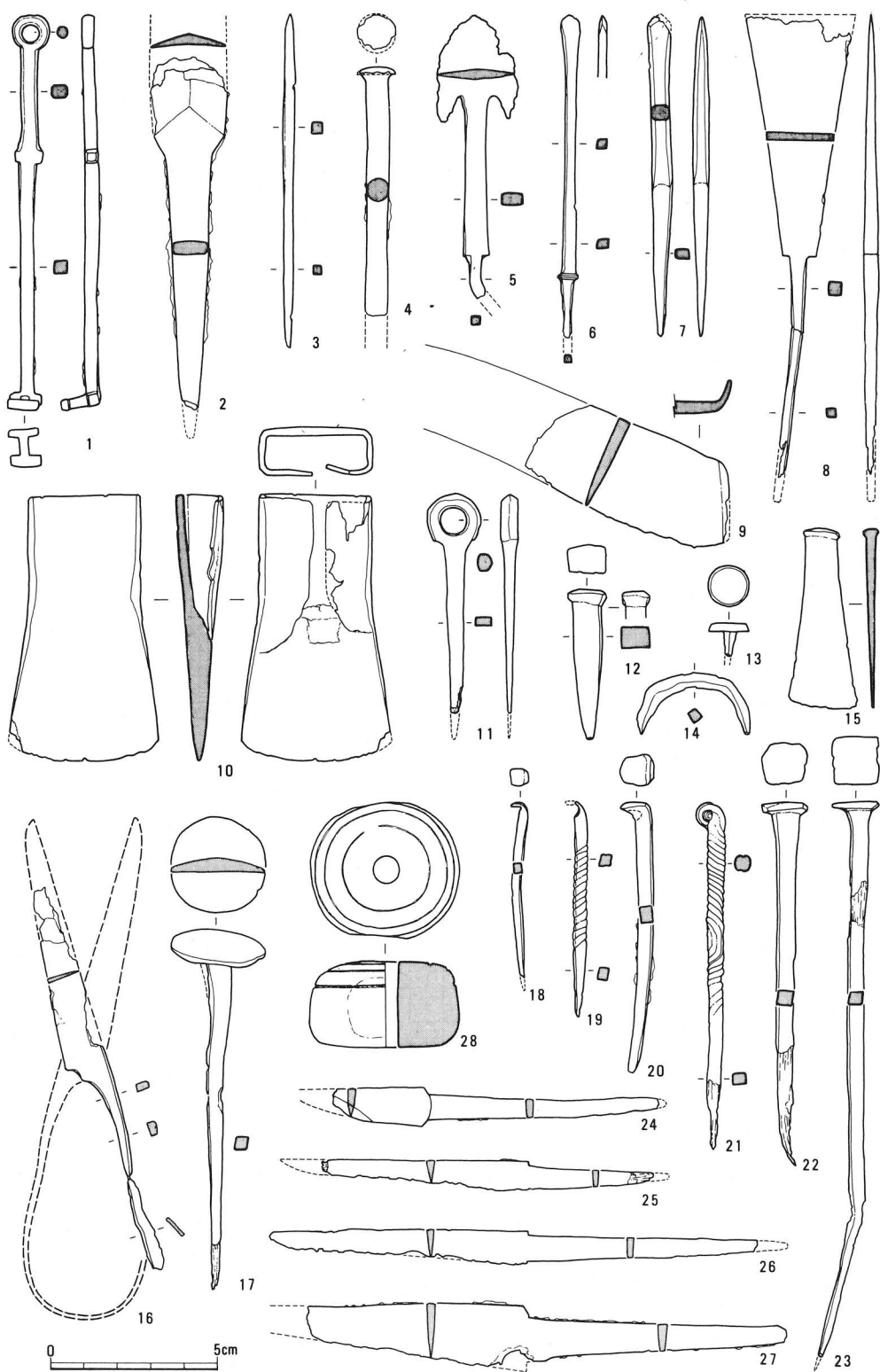


fig. 21 鉄製品・石製品実測図

部が交差するものと考えられる。奈良県珠城山古墳や群馬県乗附古墳からの出土鉄と同構造の鉄であるが、本例では後端のバネが環形から卵形へと変化するとともに、バネの断面形が円形から薄く幅をもたせた長方形へと変化している。類例に乏しいが、韓国慶州の芬皇寺石塔から発見された舎利用具の中に同形式の鉄がある。

鉾 14は小形のカスガイ。一辺0.4cm前後の角棒の両端を尖らせてU字形に折りまげる。

環頭釘 (11) 3点ある。いずれも円環部の断面を丸く、脚を断面長方形につくる。

鉄釘 頭部の残るものが114点、頭部を欠損し鎌や錐などの茎と区別しがたいものが72点ある。大半が橋脚部の中央付近から出土しており、多くは橋に使用された釘とみられる。

すべて角釘であるが、頭部の形状により以下の三形式にわかれる。**方頭釘** (22・23) 53点ある。一辺1~2.5cmまでの方形の頭部をつくり出す。脚が方頭の中央にとりつくもの、端に片寄るものなどバラエティーに富む。ほとんどが脚を折損し、全長を知りうるものは少ないが、5~6寸釘に集中する傾向が認められる。**円頭釘** (17) 頭部を円形につくるもので、端部を薄くつくるために断面は山形を呈す。12点出土。出土品は4寸以下3寸前後の長さに限られる。**折頭釘** (18~20) 脚末端を平らに叩きのばしてから折りまげたもの。43点が出土。前二者に比較して小形品が多く、2寸に満たぬ釘が多い。以上三形式の釘の他に、切断したままで特別に頭部をつくり出さぬものや、19・20にみられるように振りを加えて装飾的效果をだした釘がある。

刀子 (24~27) 刀子の出土は釘について多く42点を数える。いずれも銹化が進行し、完形に近いものは少ない。24の1例を除きすべて両面平造りで、25・26に代表される刃元の身幅0.9cm前後、身の長さ7~8cm大の刀子が大半を占める。24は茎長に対して身が短かく、片刃鎌に似た特異な形状の刀子。**棟関・刃関**とともに唯一**ひらめん**にも関をもち、関上に平肉を残す。27は身幅1.8cmの太めの刀子。他に身長5cm以下の小形の刀子がある。

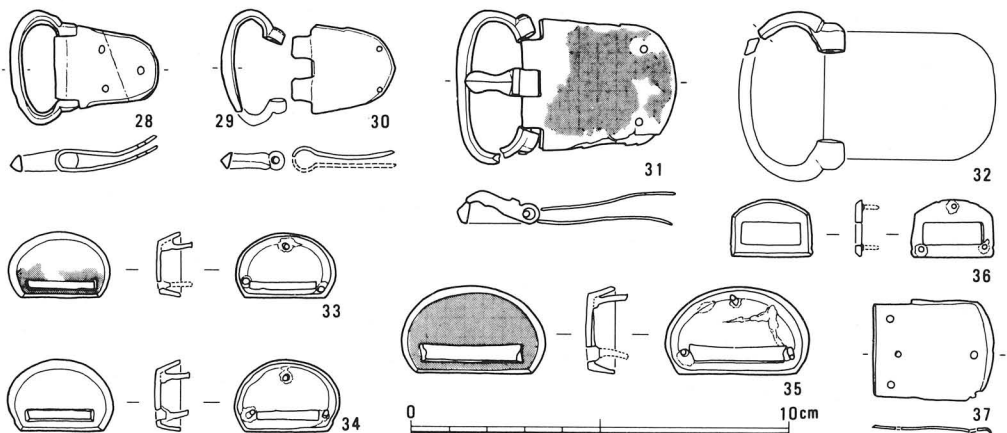
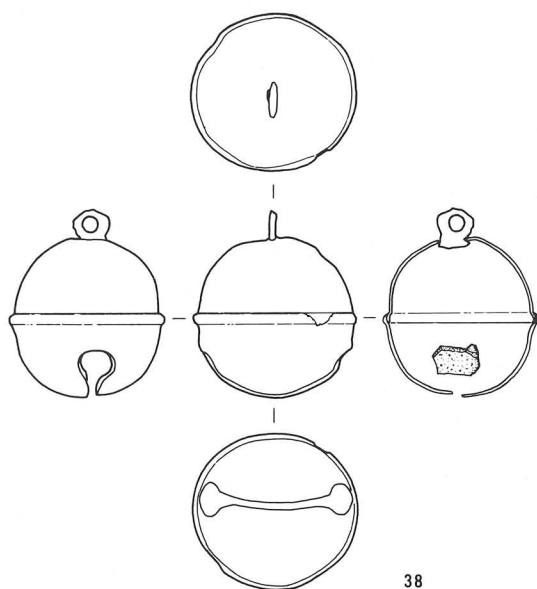
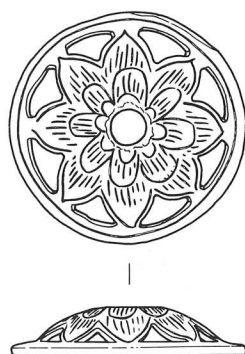


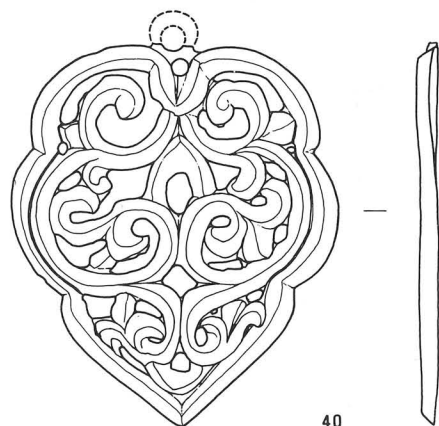
fig. 22 帯金具実測図



38



39



40

fig. 23 金銅製品実測図 ㄥ

B 銅製品 (PL.13, fig.22・23)

帯金具 (28~37) 銚子の銚具・丸柄・巡方・銚尾が10点出土した。銚具は5点ある(28~32)。28は完形品であるが、板金具に刺金を固定するための切込みがみられない特異な形式の銚具である。三銚留で銚も完存する。C字形の外枠は断面が角のとれた三角形を呈するが、鑄放しのままである。板金具の最大縦幅2.18cm。外枠内径2.28cm。同外径2.98cm。全長横幅3.90cm。29は外枠の一部を残す破損品。土圧により変形する。内面の内ペリが顕著。30は二銚留の板金具片。最大縦幅2.35cm。厚さ0.12cm。31は完形に近い銚具であるが、C字形外枠が変形、折損する。表面全体に黒漆膜が良く残る。外枠と刺金の稜は丁寧な鑄がけによって整形され断面三角に近い。板金具最大縦幅3.42cm。外枠内径3.55cm。同外径4.08cm。全長横幅4.12cm。二銚留。32は銚具外枠の基部破片。軸孔が貫通する。整形時の鑄痕が顕著に残る。丸柄は3点ある(33~35)。いずれも完形の表金具で内面の三隅に長い銚足を鑄出す。保存状態が良く表面の黒漆膜が遺存する。33は縦1.70cm、横2.61cm、高さ0.60cm、銚足先端までの厚さ0.91cm。34は同様に1.87×2.75×0.65×0.90cm。35は2.28×3.77×0.70×1.05cmを測る。36は板状の表金具であるが、丸柄と巡方の中間形態をとるものである。上辺が弧形をなす山形巡方の一種であろうか。銚を3足ともつけ根から折損する。縦1.49×横2.06cm、厚さ0.16cm。37は銚尾の裏金具。厚さ0.06cmの銅板に4孔の銚穴をあける。縦2.60cm、横3.17cm。

銅鈴 38は完存する球形の鈴である。残存状態が良く、赤銅色を呈するとともに、現在でも澄んだ金属音を発する。下面に一文字の切口をもつ下半部を大きめにつくり、中に0.6×0.4cm大の角のある小石を入れ、上半部に重ねて鑄付接合する。鈕は球頂を切り込み、鉄板をさしこんで止める。通高2.47cm、直径2.12cm、厚さ0.12cm。接合部の周長は6.55cmを測り、周長2寸2分につくられた鈴であることがわかる。

銅飾金具 (39・40) 39は円形の枠内に八弁の花形を鑄出

した銅製の饅頭金具である。花文の芯である頂部に径0.45cmの釘穴があり、銅釘が伴う。弁間を三角形に透して花文の輪郭を際立たせているが、花文の細部を鋳型に線刻したため、金具表面には細い浮線文が表われる。花文は二重の子葉をもつ重弁が描かれ、花卉全体を火焰文で埋めている。径3.05cm、高さ0.63cm、厚さ0.12cm。銅釘は径0.7cmの円形頭部をもつ長さ3.48cmの完形品。角釘であるが、脚上半部を6～7角形に面取りする。頭部に鍍金の痕跡が残り、本来は飾金具にも鍍金が施されていたことを推測させる。40は側面2カ所にくびれをもつ心葉形の飾金具。心葉形の枠内に左右対称に唐草文を透し出している。頂部の円環部を欠損するが残りは良く、鋳造後に鑢整形を行ない鍍金を施す。中央に稜のある唐草文は側面のくびれにそって三転し、各節の末端にバルメットを配す。全体的に鋳上がり甘く、文様の細部に鋭さを欠く。裏面は平坦仕上げ。縦5.0cm、横4.2cm、厚さ0.25cm。正倉院に伝存する金銀鈿荘唐大刀の鞘外装具に、本例と近似した文様展開がみられる。またくびれをもった心葉形は、正倉院の馬具杏葉の形態に似る。

C 石製品 (PL.13, fig.21)

紡錘車 28は滑石製の紡錘車である。断面形は角のとれた台形を呈し、側面の一部に平坦面をもつ。ほぼ垂直に穿たれた軸孔のまわりに三条の同心円を線刻する。重量87.1g。

D 銭貨 (PL.13)

4種91点の銅銭が出土した。その内訳は、和同開珎35点、万年通寶9点、神功開寶43点、隆平永寶1点、帰属不明銭3点である。これらは橋脚部周辺を中心に層位差をもたずに混在した状態で出土している。いずれも保存状態がよく、銭文は鮮明に残る。

和同開珎 完形に近いものが29点ある。すべて「開」字の門構えの上部が隸書風に開いた「隸開和同」とよばれるもので、古和同はない。字画が細く文字の鋳上がりもよい。背面の内郭縁の幅が広い「背広郭」が2点ある。重量ならびに径は、1.81g、2.35cmを最小に、4.20g、2.54cmを最大とするが、多くは重量2.58g、径2.47cm前後に集中する。

万年通寶 9点中完形に近いものが8点ある。厚手の造りで径も大きく、銭文の鋳出しも深い。径2.6cmを越える大形大字のものが2点ある。「年」字の第4画がはねあがった「横点万年」も3点あるが、うち1点は外縁幅が広く文字全体が縮小しており「横点潤縁」に属する。全体に範の表裏面の型合せが悪く、内郭穴に粗い鑿痕を残す例もある。出土銭は規格性に乏しく、重量3.60～5.17g、径2.53～2.69cm間にバラついて分布する。

神功開寶 出土銭のうち最多の43点が出土した。銭文が完全に残るものは25点ある。万年銭に比較するとわずかに軽量小形化する。PL.13に示したように裏面に顕著な範傷のあるものが7点ある。「功」字の旁を刀にするもの32点に対し、「力功」はわずか1点にすぎない。「側功」とよばれるものが5点あり、うち2点は大型大字である。不隸開はわずか4点。出土銭の大多数は隸開であり、「寶」字の貝が小振りで「功」字の力が狭小かつ長目の「長力」とよばれるものである。重量ならびに径は、2.43g、2.32cmを最小に、5.34g、2.69cmを最大とするが、大半は重量3.7g前後、径2.48cm前後に集中する。

隆平永寶 1点のみ出土。隆平永寶の中では小形で銭文も小さく「小字」に属する。

5 瓦 埴 (PL.15, fig. 24)

瓦は堀河S D1300より整理箱約10箱分が出土、軒瓦5点のほかには丸平瓦がある。

6281 C 藤原宮式の複弁8弁蓮華文軒丸瓦6281の新種。6281の特徴は蓮弁を輪郭線で平縁に表現し、間弁が界線状に複弁の外側をめぐることで、子葉を囲む輪郭線が左右に分離するため、複弁でありながら単弁状を呈することなど。従来A・B2種があった。本例は中房縁辺部と外区外縁が剥離するが、以下の特徴から新種と認定。CはBに類似。つまり中房が弁区より隆起する点、蓮子数が $1+8+(\quad)$ となり2重目は不詳だが1重目の数および割つけ方法、外区内縁の珠文数が32であること。他方相異点は、瓦当径および瓦当径に対する弁区径の割合がBにくらべ小さいこと、珠文がBよりも大振りで突出度も大きいこと。また、子葉が棒状で高く突出する点はCのみの特徴。丸瓦との接合位置は瓦当裏面の先端に近い。接合用補強粘土はA・Bにくらべ少く、接合線は深い円弧を描く。瓦当裏面は平坦にナデ仕上げ。胎土に粒子の粗い砂を多量に含む。焼成は堅緻、淡灰色を呈す。

6282 G 6282は6281の文様構成の系統を引くが、中房蓮子は1重となり中房径・内区径が小さくなる。中心部の蓮子の大きいことが特徴である。内区全体は凸レンズ状に盛り上る。外区内縁と外縁を画す圏線は太い。6282はA～IおよびLがあり、Aと超大型のL、小ぶりのDを除き、他は瓦当径・文様構成等よく類似。本例は型押しの際にぶれ、一部文様が二重写しになっている。丸瓦部との接合位置は瓦当裏面の中央部付近まで下り、接合線は台形を呈す。平城宮軒瓦編年の第Ⅲ期(天平7年～天平勝宝年間)。

そのほか、大きな中房をもつ凸鋸歯文圏線縁の複弁8弁蓮華文軒丸瓦6225 Aの小片1点、型式不明の軒丸瓦2点、型式不明で曲線頸の軒平瓦1点がある。

丸・平瓦 丸瓦はすべて玉縁式で、凸面にカキ目を施すものが少量あるが、多くは縦位の縄叩を施した後凸面をナデるもの。平瓦は大部分が凸面に荒い縦位の縄叩き目を施したもので、横位の縄叩き目を施すものと、叩き目を全くナデ消すものが少量ある。

埴は3点が出土、小片だが方形埴であろう。

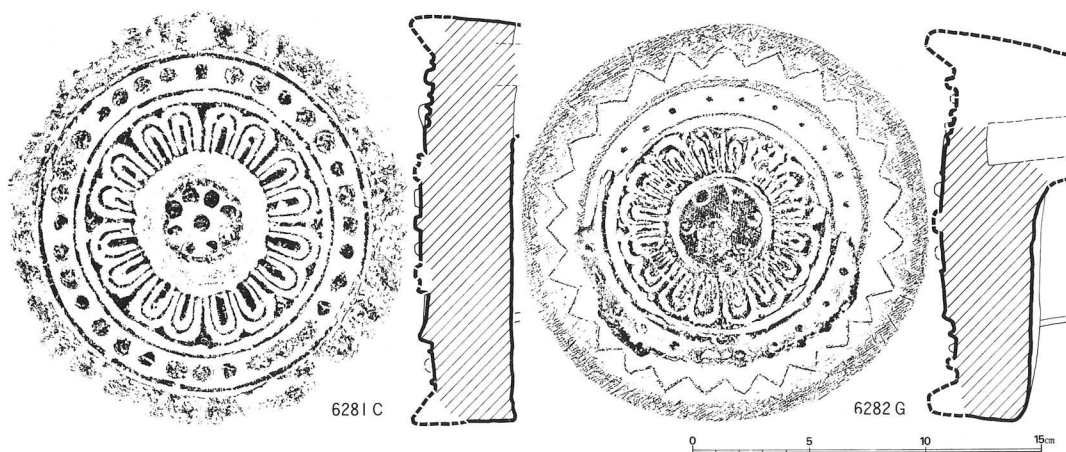


fig. 24 軒丸瓦実測図

6 木簡・墨書土器 (PL.14・15, fig. 14)

木簡 木簡は合計5点出土している。いずれも断片で判読困難なものが多いが、5点のうち4点は文書の断片、他の1点は形態からみて付札と考えられる。判読可能は4点のみ。

1) 進人 (91)×40×7 6019

上端は斜めに削った調整面をのこしている。下端は欠損。

2) ・□直十五□^[文カ]

・ □□ (57)×(6)×6 6081

文書の断片、物品の直を記したもの。

3) ・□□□^[米カ]

・ □□□ (128)×32×4 6039

上端部は原形をとどめ、切り込みを残している。下端欠損。

4) ・□□道謹^[光カ] (167)×(16)×1 6081

右側面にのみ調整面をとどめている。文書の断片か、習書の類か。

墨書土器 合計31点の墨書土器が東堀河S D1300から出土した。墨書の内容および器種・部位等は別表に纏めた。内容からみて、氏名ないし地名と思われるものに「佐太」「竹田」、人名と思われるものに「食女」「孝麻呂」がある。また土器の器種名を示した「坏」、吉祥句かと思われる「福」「千万」などもみえる。

No.	墨書内容	器 種	部 位	No.	墨書内容	器 種	部 位
1	佐 太	土師器 皿A	底 外	16	大 ^(墨ヘラ)	須恵器 杯B蓋	頂 外
2	竹 田	〃 杯ないし皿	〃	17	大	〃 杯A	底 外
3	室 □	須恵器 杯	〃	18	大	土師器 皿A	〃
4	林	〃 皿A	〃	19	扣	須恵器 杯B	〃
5	食 女	〃 杯ないし皿	〃	20	杓	土師器 杯ないし皿	〃
6	孝麻□	〃 杯B蓋	頂 外	21	子	須恵器 杯B蓋	頂 外
7	那 都	〃 〃	〃	22	東	土師器 杯A	底 外
8	坏	土師器 杯ないし皿	底 外	23	式(逆字)	須恵器 杯B蓋	頂 外
9	福	須恵器 杯B蓋	つまみ	24	田	土師器 杯ないし皿	底 外
10	千 万	〃 杯B	底 外	25	八	〃 皿A	〃
11	千 □	〃 杯B蓋	頂 外	26	十	〃 杯ないし皿	〃
12	吉	〃 〃	〃	27	(記号)	須恵器 杯B	口縁外
13	□ □ ^{[御カ][南カ]}	〃 杯ないし皿	底 外	28	(記号)	〃 〃	底 外
14	膳 于	土師器 〃	〃	29	(記号)	〃 〃	〃
15	綿 □	須恵器 杯B蓋	頂 外	30	(記号)	〃 杯B蓋	頂 外

tab. 1 墨書土器一覧

7 人骨・動物遺存体 (fig. 25)

溝の埋土には多くの骨片が含まれていた。そのほとんどは骨に含まれるリン酸と地下水に含まれる鉄分の化合した藍鉄鉱 ($\text{Fe}_3\text{P}_2\text{O}_8 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$) におおわれている。そのため小さく薄い破片は土中に痕跡を残すのみで、採取できたのは一部の大形の骨だけである。種名、部位が同定できたのは以下の通り。

ヒト *Homo sapiens* Linnaeus 人骨は頭骨片で左右頭頂骨片 3 点、後頭骨片 2 点、および左側頭骨の外耳孔上縁部および乳様突起の計 5 点。頭頂骨片、後頭骨片および側頭骨片は、出土状態および保存されている頭骨片の形状から同一個体の頭骨と推定する。頭頂骨及び同側頭骨の外板と内板の緻密質は表面滑沢で茶褐色を呈す。外板と内板にはさまれた海綿質の板間層は、堆積泥土を含み厚さを増して、堆積泥土を含まない内、外板との間は遊離している。左頭頂骨片の内頭蓋冠部には明瞭に発達した動脈溝がみられる。頭頂部には中等度に発達した頭頂結節が認められる。僅かに保存されている矢状溝の明瞭な切れ込みから、若年から壮年の個体の頭骨片と推定する。後頭骨片の内頭蓋冠部には明瞭な動脈溝、ゆるやかな凹みの右横洞溝が認められる。内後頭稜の発達は悪く、軽い膨隆として認められる。下後頭窩はいくぶん深目のくぼみを形成する。左側頭骨片の乳様突起の突起部は欠損しているが、保存されている乳様突起の形状は女性的である。(葉山杉夫)

ウマ *Equus caballus* Linnaeus 同定できた破片数は 12 点で最も多い。主要な計測値は以下のようなものである。上顎第 2 小臼歯 (P^2) 幅 27.3, 長さ 24.4, 第 1 大臼歯 (M^1) 幅 27.5, 長さ 21.7, 中手骨遠位端最大幅 43.0。

ウシ *Bos* gen. et sp. indet. 左踵骨破片が 1 点ある。

イヌ *Canis familiaris* Linnaeus 下顎骨破片が左右各 1 点出土。大きさが異なり別個体のもの。1 例の小臼歯歯列長 (Length of the premola row $\text{P}_1\text{--P}_4$) は推定 25、第 1 大臼歯槽長は推定 24 である。(計測単位は mm)

イノシシ *Sus leucomystax* Temminck 右側の牙が 1 点出土した。

1 学名の属名と種名はイタリック体で表記する慣例に従った

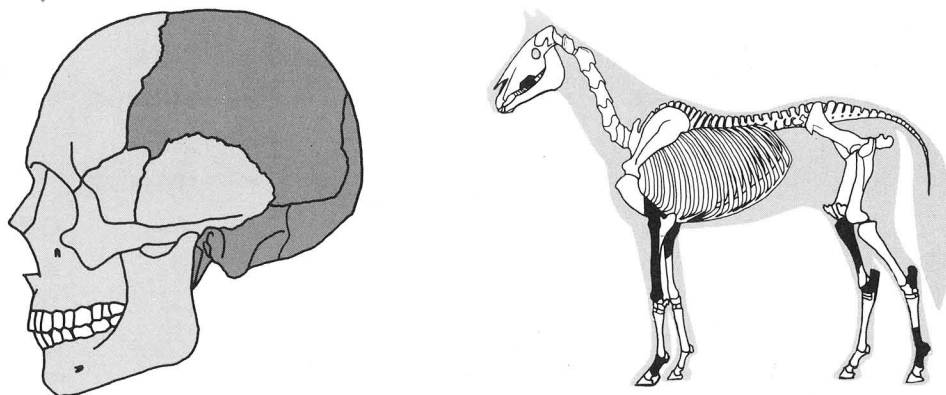


fig. 25 人骨・馬骨の遺存状況